

VII-1 針刺し・切創、血液曝露防止対策

1 曝露防止対策の基本

- 1 リキャップ禁止
- 2 安全装置付き器材の正しい使用
- 3 携帯型針廃棄容器の持参
- 4 手袋の装着
- 5 B型肝炎ワクチンの接種

2 曝露防止対策の心構え

- (1) 針を取り扱う時は、あわてないで冷静に取り組む
- (2) 針を持ったまま、他の動作を行わない
- (3) 使用後の針は手渡ししない

3 安全な作業環境の確保と準備

- (1) 作業に適した明るさを確保する
- (2) 安全に作業を行えるよう作業スペースを確保する
- (3) 作業しやすいようベッドの高さを調節する
- (4) 手袋は自身の手にはフィットするものを選ぶ
- (5) 携帯型針廃棄容器は使用後すぐに安全に針を廃棄できる場所に準備（セット）する
- (6) 針を取り扱っている医療従事者の手元に近づかない（手の交差による針刺しを防ぐため、近づく必要がある場合は、声をかける）
- (7) 業務が集中する時間帯での採血・注射作業はなるべく避ける



点滴刺入用のワゴン

携帯型針廃棄
容器の持参



採血準備用のワゴン

4 患者への説明

- (1) 採血・注射の際は動かないよう、前もって説明し協力を得る
- (2) 協力を得られない状況の時は、共同作業者の応援を求める

5 手袋の着用

- (1) 血液に接触した時に、手にある小さな傷からの病原体の侵入を防ぐ
- (2) 針刺し・切創が発生した時に、手袋が1枚あることによって針に付着している血液を減少させる
- (3) 皮膚を守り体内に侵入する血液・体液量を減少させる

6 適切な作業手順

- (1) 安全装置付きの針の正しい使用
安全装置付きの使用法について理解することが重要である。初めて使用する場合、必ず上司に相談する。翼状針による事象が多いことから、針先をぶらぶらさせる行為は絶対にしてはいけない。
- (2) 携帯型針廃棄容器の持参
 - ① 針を使用する場へ携帯型針廃棄容器を必ず持参する。
 - ② 携帯型針廃棄容器は使用時以外、仮フタを閉めておく。
 - ③ 使用後の針はリキャップせずに、すぐに携帯型針廃棄容器へ廃棄する。
- (3) 静脈採血方法
 - ① 翼状針または直針による真空管採血方法を第1選択とする
 - ② 真空管採血が適さない場合は、注射器による採血を選択する。注射器による採血を行う場合は安全装置付き翼状針を使用する。採血管への分注作業は、指などを針で刺したり、針と注射器の接続が外れ、血液を噴霧させたりするリスクが生じる。したがって、採血管を手で持った形での分注作業をしてはいけない。分注作業を行う場合は、必ず分注ホルダーを使用する。
- (4) 手術や処置時における切創事象の注意事項
手術などで、術者—患者間での感染症伝搬の報告があり、針刺し事象同様にその発生には十分注意を払う。
 - ① 手術や処置で使用する鋭利のものは、直接機械板に置かず膿盆などに入れる。
 - ② 医師はメスや持針器などを直接手渡さないで、機械板に置く。
 - ③ 可能な限り鈍針を使用する。
 - ④ 血液が付着した針類、ゴミ類は適切に分別する。
- (5) 血液曝露防止
血液曝露が予想されるような処置時にはガウン、マスク、フェイスシールド（あるいはゴーグル）、キャップを着用する。